

ケンタロウと良子

りょうこ

良子は半年ほど前から殆ど外出せず、一日中、身の回りの整理に時間を費やしていた。

自分の着物類、洋服類、アクセサリー類などの品物に始まって、家具や食器類など大まかに分類して、跡は相続人にまかすつもりだが、着物やアクセサリーは親しい友人に形見分けするつもりだ。

良子は庭や玄関先の植木鉢まで、みんなカラにして物置の中に積み上げた。夫が亡くなった三年前、一人暮らしになったのを機に、夫のたくさんのお金を処分し、日常生活に必要な以外のものは、あらかじめ整理整頓したつもりだったが、いざ家をあげようと思うと、二ヶ月や三ヶ月ではきかなかった。これでは後はもうきりがないと、開きなおった。完璧に塵一つ残さずと力んでみても、良子には気持ちも体も耐えるだけの力がなかった。

安宅町 川元信子

「今度の入院で、もうこの家に戻るのには寝台車に乗ってだろう」と思っている。

それでも家に対する思い入れもなく、この地に長く暮らしたと言う郷愁もなかった。平穩無事な人生だったと、諦めに似た気持ちが良子の中を流れていた。

八帖と十帖の二間の和室のすみに、スーツケースと小さなダンボール箱が一つ。入院当日に、良子が病室に持ち込む荷物だった。入院後必要なものは、院内の売店で全て揃う。それでも毎日が少しでも潤うようにと、お気に入りのカーディガンや、外出が許された時のための外出着など持っていくことにした。

「あつちがいいか。いやこれのほうが」と鏡の前で選り好みをしていると、「どちらだっていいのに」と思いつつも、まだ女の自

分を残している己の命が、愛おしかった。

良子は五十歳。子供はいなかった。

四十歳でガンが見つかり手術した。夫の死後再発。除いたものの今年再び見つかった。どうも良子の家系はガン系統らしい。姉は良子が二歳の時なくなった。小児ガンらしい。父は仕事上の事故だった。母もガンだった。

心臓の持病があったとはいえ、突然死を迎えた夫は、真面目で物静かな公務員で、趣味は読書。いつも机の前にすわっていた。義父と義母との同居だったが、二人共無口な息子より快活な良子と、茶の間で過ごすことが多かった。多少窮屈な結婚生活ではあったが、帰る家のない良子には、唯一の家庭であり、身内と呼べる人たちだった。

そんな家族も七年目に相次いでなくなった。その時の方が、今より心をかき乱された気がする。

入院生活も心配ないだけの金銭的なゆとりもあり、土地建物は、都会に住む夫の弟に相続させることになっている。その弟に自分の葬儀は任せてある。弟の嫁の晴子とは最初から気が合って、仲良くしているから、入院後何回かは見舞ってくれるだろう。心残りは何もない。

ただ一つ、良子が、密かに決心していることがあった。

一ヶ月前。

良子が育った、隣のK市にいる、幼馴染のケンタロウから電話があった。「どうしても会ってほしい」と言う。

良子が嫁いで以来、まったく交流がなかった。良子の結婚式場

でケンタロウが、花嫁を気安く呼び捨てにしたのに、両親が不快感を表したのを見て、ケンタロウの母親が気を回してケンタロウに良子との付き合い方を、示唆したらしかった。ケンタロウの母とは何度か話をしたがケンタロウには会っていない。

ケンタロウは未だ独身で、今は自分も一人身だ。

「いいよ」と、その場で短く返事した。電話を切ってから、急にドキドキした。

「地球の最後を迎える日が来たときは、夫も子供も捨てて、初恋の人の処へ走る」と真顔で言った、親友の恵子の言葉が胸にひびいた。

「人生最後まで、ときめく事なかったなんて、そんなのもったいない」

「私の最後は、ほんのちよつぱり、ふしだらだていいじゃない」そう決心すると、娘時代にもなかった心の高ぶりで、一睡もできなかった。

五月に入ったばかりのある日、朝風呂を使った良子は、季節に合わせて白大島と博多帯で整えた。これは、母親が嫁入りのためにかなり無理して揃えたものだ。そのときケンタロウもそばにいたはずだが、「憶えてはいないだろう」

一人苦笑しながら、気持が昔に戻っている。

電車でK市に向かうつもりでいる。

「ケンタロウにはもったいないようなおめかしよ」と言ってるつもりだ。

ケンタロウと良子の家は、裏庭でつながった小さな平屋だった。

良子の家は、良子が父を事故で失い母一人子一人の家庭にな

り、ケンタロウの家は、ケンタロウが幼児のとき父親を亡くして、同じ母子家庭だった。

家は街に近かったが、少し歩くと漏があった。

良子たちが住んでいた所は、昔引揚者住宅と言われていて、小さな住宅が並んで住宅街を作っていた。特に良子たちの家のあたりは「後家通り」と呼ばれるほど、母子家庭が多かった。生活レベルが同じようなもので、お互い仲良くやっていた。良子とケンタロウの母は、歳も一緒に同じ歳の子供をかかえていた、親戚同様の付き合いをしていた。

「カアちゃん、パンツ外に干すなと言っただろう」

中学からバスケットを始めたケンタロウの家は、毎日の洗濯が大変だった。給食センターで働く母は、裏庭の干場に出ずっぱり状態だ。ケンタロウがパンツを干すなと大声で文句を言い始めたのは、高校に入ってからである。

「うるさいねえ。自分で洗いたくなくせに、パンツは中に干してあるよ。今干してるのは、下着のパンツだよ」

母親は、ケンタロウの柄パンを大きく広げて、一番陽の当たる隣家の庭の境に干した。いつもの定位置である。

「部のパンツはいいんだよ。柄パンを干すなってんだよ。みっともないだろう」

叫びながらケンタロウはバタバタと走ってきて、自分のパンツを取り込んでいった。

「なんだい。良子ちゃんに見られたくないのか。いまさらかつつけても遅いよ」

母親は、そんな息子がうれしいのか、聞えよがしに声を大きくする。

良子の母親が庭に出てきた。両家はいつも同じような時間にせんとく物を庭に出す。

「大きな声で良子の名前なんぞ出さないでよ。こつちも年頃で力かりしてるんだからね」

良子の下着は中学の頃から家の中に干している。年頃の娘の下着を外に干すのは、物騒だからだ。住宅街の下着下口は、よくテレビのニュースになっている。ケンタロウの家はおかまなしで、良子の裏庭まではみ出して干していた。

「ああ、ごめんよ。良子ちゃんとうちのバカ息子じゃ、つり鐘にちようちゃんよ。それなのに一人前に意識しちゃって」

ケンタロウの母は、同じ家庭に育ったような息子と娘が、年頃になっても「何かあるんじゃないか」などとカンぐるようなことは皆無だった。

良子の母の志津は、多少気がかりな風をみせることはあったが、ケンタロウの性格がいいのと彼の風貌と学力では、良子が相手にしないだろうと思っていた。

ケンタロウは、身長が一八〇センチ以上あり、肩や胸に厚みがあつて亡くなった父親似の「ごつい顔」だった。バスケットの選手だったが、柔道部の顧問にいつも引張られていた。他の選手のようにスラリとした足ではないが、得点を取るのにエースだった。だから学校内でももてたし、他校の女子たちがわざわざ見に来るほどだった。それで彼のゲームシャツが盗まれたこともあった。

だがそれ以上に良子は清潔そうな印象の美少女として名をはせていた。身長も高くスラリとしている。学内成績はトップだし、高校二年生からテニス部のキャプテンだった。ただ最初から進学

を望まなかったので、商業高校に進んだ。開校以来の成績の良子に、学校を挙げて就職先をあたっていた。工業高校のケンタロウは、遠縁で子供のいない叔母の家の建築会社就職が決まっていた。

高校三年の夏、部活は終了した。

何もすることがなくなつて、ケンタロウは学校から帰ると、家ではゴロゴロすることが多くなり、どんどん太り始めた。

「お前、相撲部だつたつて、まさか俺たちの部じゃないよなあ」同じ部の仲間がからかうようになり、良子の周りの女の子たちから、「工業の高木ケンタロウにはガツカリよ」という声を聞くようになった。

あんなにもてた幼馴染が、女の子から「ガツカリ」なんて言われて良子は悔しかった。日頃は口喧嘩したり、母親に悪口を言ったりしていても、人からくさされると、やはり悔しい。ケンタロウを又もてる男にしてやりたい。そう思つて良子はケンタロウを外に連れ出すようになった。

美人の良子と一緒に歩いただけで、たちまち評判になり「気を付けなさいよ」と、良子の母に注意する女もいた。

「良子ちゃん、うちの息子をからかつてるの。並んで歩けば、一遍でうわさになるくらい、わかつているでしょうに」とケンタロウの母は志津に苦情を言った。

だがそれもほんの一時で、一度に鎮静化する出来事が起こった。良子とケンタロウが乗ったボートが潟の真ん中で転覆したのだ。

太りすぎのケンタロウが、漕ぎ手の良子とのバランスをとろうとして、身体を揺すつたため、「あつ」と思うと同時に二人とも

水の中だつた。カナヅチで必死にもかくケンタロウを舟につかまらせると良子は岸へ泳いで助けを求めた。泳いでくる良子に気付いた人がいて、すぐモーターボートを出してくれた。

ケンタロウは真つ青な顔で、ずぶぬれの服の上に毛布を掛けられて、モーターボートで岸に着いたときには、もう良子が家であ替えて庭に干して合つたケンタロウの着替えを抱えて来ていた。

周りの男たちより二回りも大きいケンタロウは、みんなに毛布の上から身体をさすられていた。本人は唇をわなわなと震わせている。

その晩、隣からいつもは大音響で聞こえてくるテレビの音もせず、茶の間に電気がついているだけだつた。ケンタロウの母親が夕食前に「良子ちゃんありがとうね」と、短く礼を言つたきりだ。

次の日、学校で良子もケンタロウも評判になつていた。スポーツ万能の良子が、意外な事にカナヅチだつたケンタロウを助けたということ、二人がどうこうという噂は消し飛んだ。

ケンタロウは女子から総スカンをくい、男子からは今まででもた分のお返しだと言わんばかりに、大声でからかわれた。

ケンタロウは良子と口をきかなくなった。顔を合わせることも避けているようだ。

母親たちも、庭越しのおしゃべりをすることもなくなり、挨拶を交わす程度になつた。

良子には、「気を付けてよ。もう年頃なんだから、おかしな噂をたてられたりしたら」とグチつた。以前は「隣のケンちゃんみたいなのが、分相応でお前の言いなりになる優しい亭主になるよ。私も気の張らない楽な暮らしが出来そうだし」などと言つ

て、良子をカンカンに怒らせたことがあったのに、やはり年頃になると「玉の輿」をと、欲が出るらしい。

逆に良子は、どちらの家も行ったり来たり出来る気楽な縁も、悪くないと漠然と思い始めた。

子供の頃はケンタロウが良子の家で食事をしたり、母親が留守のときは泊まったりもした。良子の方も志津が病気の時は、ケンタロウの母親が、二人分の弁当を作って持たせてくれたりしたのだ。

まわりで色々にぎやかに騒ぐのがおさまって、高校卒業と同時にドタバタは終了した。

良子は県内の大手銀行に就職した。ケンタロウは、となり町の叔母の建築会社へ入社して、現場見習いで一年は住み込みの生活になった。

親たちはひとまず安心とおもったのか、又以前のように庭に出て、たわいのないおしゃべりを楽しむようになった。

そして一年目を過ぎる頃、良子に縁談が持ち上がった。銀行の上得意の客が、窓口の良子を見初め「是非、息子に」と望まれたのだった。

「本人抜きの話なんて」と志津は最初しぶったが、銀行の方が力を入れてくれ、本人に会って「悪くない」と思い始めたようだ。

良子は相手が「好い、悪い」の問題ではなかった。二十歳前の娘にとって「結婚」など眼中にない。「まだ結婚はしたくない」の気持でいっぱいなのだ。

だが二年目になると、良子の結婚が決まった。

志津がガンになり進行が速いので「娘の花嫁姿を見て死にた

い」と言い出したのだ。良子も相手の男性に悪い印象を持っていないようだし、家族を挙げて良子を迎えたいとの思いが強いのが、志津を安心させていた。

良子が結婚を決意したとわかり、志津はケンタロウの家を訪ねた。

自分が良子の結婚式まで持たないようなら親代わりをして欲しいと頼んだのだ。

志津の兄は、一人身で九州の田舎で入院中だし、夫の方は長く付き合いがなく葬式は知らせてきても、結婚は祝いを贈るだけの付き合いだから「列席者のいない良子が可愛そうだ」と咽び泣いた。

「わかったよ。良子ちゃんのために、一世一代のおめかしをして出席させてもらうよ」

ケンタロウの母は声を詰まらせながらそう言った。彼女は男勝りでがさつに見せていたけれども、結構美人で場所に出ればそれなりに振舞うだけの教養があることを、志津は長い付き合いの中で知っていた。

「ケンタロウ、お前は良子ちゃんの父親がわりだよ」と、ぼんやり立っているケンタロウを座らせて、志津の前で無理やり「任せてください」と言わせた。

ケンタロウは一年の間に、驚くほど逞しくなり、大人っぽくなって、父親とはいかないまでも年の離れた兄貴のように見える。

「あんまり喋らなきや、お前もちよつとした建築会社の主任クラスにはみえるよ」

母親はそう言いながら、頼もしそうに息子を見上げた。

ケンタロウはずっと黙っていたが「何で良子の結婚を急ぐんだ

よ。良子だって早く結婚したがっているわけじゃない」と、駄々をこねるように言った。

「それは志津さんの病気が……」

まったく飲み込みが悪いと言うように母親が言うと「だったら俺が貰う」とケンタロウは上ずった声をあげた。

「俺があと一年もしたら、小さい現場を任されるようになる。今でも充分生活するだけの金はもらっている。第一、うちに来ればおばちゃんの蓄えを注ぎ込んで嫁入り道具だの着物などと、無理する必要がないじゃないか」

「家二軒つないでリフォームするくらいお手のものや」

ケンタロウは「これで決まりや」と言うように明るい声で言った。

「だからお前は単細胞なんだよ。この話はまたとない良縁だし、そういう無理が娘を持った親の楽しみなんだよ」

「お前が名乗り出てどうすんだよ」

「結婚がいやだというのは、嫁入り前の娘らしい気持だよ。相手に不満があるというんじゃないよ」

ケンタロウを戒めながら、あと少し迷いのある志津を後押しするように続けた。

「良子ちゃんは娘のように可愛いよ。お前と一緒にしてくれると言えば、涙が出るほど嬉しいよ。だけど娘のように思っているからこそ、この縁を断ることはないと思うんだよ。こちらの事情を充分知った上で望まれて嫁ぐんだから、「玉の輿」と言う言い方は悪いけど「ご縁」というものだよ」

「志津ちゃん気にしないでよ。息子は息子なりに良子ちゃんの兄のような気持でいるんだから。良子ちゃんもこの家を実家と思っ

てグチを言いに来ればいいさ」

ケンタロウの母は、うれし涙を流しながら自分の考えに頷いていた。ケンタロウは不満そうな顔をして黙っていた。

志津は式に出ることが出来た。出席はケンタロウ親子だけで。嫁ぎ先の方もそのことを考慮して、息子の希望だからと言うことで、県外に住む弟のみが出席して、軽井沢の小さな教会で式を挙げた。その一年後、同じ家族に見取られて志津は逝った。

良子は車の運転は疲れるので、電車で行くとケンタロウに告げた。それなら駅まで迎えに行くと言う。K駅は今では無人駅になっている。

昨年母を亡くして、ケンタロウは本当の一人身になった。

建設会社は不景気ながら、社長のケンタロウのガンバリで経営的に安定している。なのに一度も結婚歴がないのは、しっかり者の母親が何かと口出すのと、見かけによらず親孝行の息子が母親に頭が上がりないということになっているらしかった。

そんなケンタロウに会うのに、良子は電話を受けて以来気持が騒めきばなしである。葬儀の折は黙礼するのがやっとだった。弔問客でごったがえしていたからだ。良子は幼馴染の成功が嬉しかった。

駅を出ると、駅のすぐ前に車を止めてケンタロウが立っていた。高級車である。

「見栄を張って」と一瞬おもったが、今のケンタロウからしたら、普通のことと納得した。

「なんだ、めかし込んで」と意外そうな様子を見せて、嬉しそうに車のドアを開けた。

「こんなの普段着よ」と応じながら「大島なんかわかるわけない」と思ったが、愛想を言うようになったケンタロウを見るのは初めてだった。良子はまだ平常心でいられない。

ケンタロウの運転はうまかった。

ブランド物のポロシャツと替え上着で、一応めかしこんでいたが、大型ダンブが似合いそうな感じは昔と変わらない。

「殆どこっちへ来なかったろう。近くなのに来ないねって、おふくろがグチってた」

ケンタロウの口から「おふくろ」が出てくるのは何度目だろう。これだから嫁の来てがなかったのだろうか。ケンタロウの親思いは昔からなのに、良子はちよつと可哀想になった。

K市も大型店が郊外に出来ていて、町の中はさびれていた。

良子が住んでいた家の当たりは、個々に建て替えられて、小ざれいになっていたが、狭い道路と敷地のせいで、老人二人暮らしが多かった。ケンタロウの家は、良子の家の分を一緒にして建て替え、車が入れるようになっていた。

車で案内してもらっているうちに、二人とも緊張がほぐれて、子供の頃の話など話題は尽きなかった。

昼はケンタロウが予約してあった高級料理店とつた。

「これは俺の奢り、俺の奢り」とケンタロウが何度も言う。これも二人が貧しかった時代の名残だ。「払うつもりないわよ」と遠慮ない口を利きながら、「昔と同じ」と笑いあった。

すっかり打ち解けたとき、突然ケンタロウが「潟へ行こう」と言った。二人にとって因縁の場所である。ケンタロウがこだわっていないのなら、潟へ車を走らせた。

近年ボートや、屋形船を入れて町おこしをしていると言っている

たが、潟は前より小さくなり、人影はまばらだった。ボートは一艘潟に出ているだけで、幾つも空いていた。

ケンタロウはごく自然にボートに乗りオールをにぎった。良子に手を貸してくれるわけでもない。気を遣ってくれるようだと、場が持たなくなるだろうと良子は思った。「この世の最後の時には昔の恋人の処に行く」と宣言していた恵子の言葉が耳をよぎった。ケンタロウが結婚を申し込んだら、最後に自分は淡い思いを成就させたい。思い残すことがないように。反面さつきまでの子供の頃の自然な雰囲気、そのままにしておきたい気持ちもあった。

水の上はオールの起こす波だけだ。良子はそれを見続けている。

「これくらいのさざ波が私の人生にあつたって」

良子は自分にいきかせた。「あの時ケンタロウと結婚する選択だつてあつたのでは」と、志津の葬儀の後、後悔の気持ちが湧いたことを「ふっ」と思い出した。

急にケンタロウが「ワアッ」と叫んだかとおもうと、ボートが左右に揺れだした。ケンタロウは大きな身体を右、左と体重を移動させている。良子は昔の恐怖を思い出した。あの時と違って自分はまだ体力がない。その上着物姿である。良子は「死」を意識した。目をつぶって、すっかりボートの縁をつかみながら、ケンタロウとここで死を迎えるかと思うと、少しも悔いを感じなかった。病院で一人迎えるかもしれない自分の死の恐怖よりかは、まだ慰められた。

そう思うと、涙がポロポロこぼれた。喉が締め付けられ、首を絞められる鳥の断末魔のような声が出た。

「ゴメンよ。ゴメンよ。そんなに怖がるとは思わなかった」と、

ケンタロウの声が耳に入った。ボートの揺れは止まっていた。ケンタロウは青くなつてしよげている。

良子は小刻みに震えていた。恐怖ではないが、ケンタロウとの最後の思い出がこんな形なのかと、やるせないかったのだ。ケンタロウは、良子の震えが止まるまでじつと黙つたまま水面を眺めていた。

「本当はちよつと脅かすつもりだったんだけど、泣かれるなんて思わなかったな。ここは昔と違つて水面から五十センチぐらいの深さしかないんだ。知らないとは思わなかったから。でなきゃこんなマネしないよ」

「本当にゴメンな」

ケンタロウはゆつくりとした調子であやまつた。涙声になつていた。それからちよつと間があつて、「ニヤツ」とした。

「なんだか俺、良子に泣かれて昔の自信を取り戻したような気がする。良子に助けられて「情けない男」のレッテルを貼られたように、いまいち女に積極的になれなかった。いや、良子のせいではないよ」

ケンタロウはあわてて言つた。すっかり良子を泣かしていたワシンパクにもどつていた。

「俺に根性がなくて結婚出来なかっただけなんだけど」

ケンタロウはテレ笑いをしながら言つた。

「でも今度は何とかしなきゃならなくなつて。おふくろが死んで、叔母ちゃんが面倒見れないと怒つてしまつて、女なら文句を言わずに貰えといわれてしまつた」

「それでトラウマになつてこの渦で、最後の決心をしようと良子を誘つたんだ。もう一押しして欲しかったんだけど、本気で泣

かれてしまつて」と多少嬉しそうに言つた。

「決心さえしてしまえば、それなりに上手くいくのよ結婚は。私だつて決まつてしまえばそれなりによ。何とか上手く進んでいくものなのよ人生は」

良子はケンタロウの母が、良子が嫁ぐことが決まつた日に、そうハッパを掛けてくれた言葉を、ケンタロウに贈つた。

「良子、幸せだったんだ」

そう言うとい人納得した様子でボートを岸に向けた。

「何を期待してたのかしら」

良子は「ホッ」としたような物足りないような気分だった。

「ケンタロウの結婚が、どうか上手くいくように」

良子は心からそう祈つた。

「これで夫の元へ、胸を張つていける」と良子は思った。なによりもケンタロウとの思い出を壊すことがなかったことを喜んだ。

良子は黙つて、規則正しいオール音を聴いていた。水面はキラキラ光っている。